

特集

ジレンマ・メソッド

実践の深化, ファシリテーター育成,

臨床現場では、患者・家族の意向、医療者の専門的判断、組織や制度上の制約など、複数の価値が交錯する場面が少なくありません。そこでは、誰か1人が正解を導き出すのではなく、関係者がそれぞれの見方や迷いを持ち寄り、対話を通してよりよい選択肢を探っていくことが求められます。

倫理カンファレンスは、こうした倫理的課題にチームで向き合うための重要な場です。国内では、4分割法や臨床倫理検討シートなど、さまざまな方法が用いられてきました。その中で、MCD (Moral Case Deliberation) の1手法であるジレンマ・メソッドは、参加者が事例提供者のジレンマを出発点に、価値の対立や選択肢を丁寧に検討していく方法です。

本誌では2019年8月号でジレンマ・メソッドを取り上げました。その後、国内の医療機関における実践、ファシリテーター養成研修、倫理カンファレンスの評価法開発など、実践を支える基盤づくりが進められてきました。さらに、より簡便にMCDを行う方法としてCURAも開発され、倫理的課題について対話するための選択肢は広がりつつあります。

本特集では、ジレンマ・メソッドの全体像と近年の進展を整理した上で、医療機関における実践例、ファシリテーター育成の取り組み、Euro-MCDに基づく評価法開発、そしてCURAの活用可能性を紹介します。現場の対話を支え、組織の倫理的実践を深めていくための手がかりとなることを期待します。

を実装する

評価法の開発へ